くっきり！福祉の未来形
公益財団法人　日本社会福祉弘済会

Welfare ［ウェルフェア］

2019
66

「空飛ぶ車いす」特集号
～青少年の活動レポート～

アジアに届け!!
「空飛ぶ車いす」

CONTENTS

P2　「空飛ぶ車いす」の活動が日韓国際環境賞を受賞!
愛媛県立新居浜工業高校

P4　2019震災復興と車いす支援
空飛ぶ車いす 東北へ行く!!（9回目）

P8　「空飛ぶ車いす」海外活動 in スリランカ
グローバルな視点の育成を目指して
新潟県立新潟工業高等学校

P10　「空飛ぶ車いす」海外活動 in タイ
神戸市立科学技術高等学校 空飛ぶ車いす研究会

P16　ジャワ島からのレポート

P17　バングラデシュへの贈り物　～マイメンシン県の障害者へ～

P18　いわて車いすフレンズ･あきた車いすリサイクリングセミナー

P19　福祉の共済コーナー

［日社済ニュース］Nisshasai NEWS 66

ハートで支える日社済

空飛ぶ車いす活動
『日韓国際環境賞』を受賞する!!

愛媛県立新居浜工業高等学校

日韓国際環境賞は1995年に毎日新聞社と朝鮮日報社が東アジア地域を中心に環境保護や公害防止などの活動に優れた貢献をした個人や団体を顕彰することを目的に制定し、日本と韓国から毎年各1団体が表彰されます。

今回日本からは愛媛県立新居浜工業高等学校VYS（Voluntary Youth Socialworker）部が受賞し、10月31日第25回日韓国際環境賞受賞式が実施されました。

今回の受賞は、たくさんの応募の中から12件が最終審査委員会に提出され、その中から見事選出されたものです。車いす再生＝リサイクル活動は、福祉面で立派な活動であると同時に環境問題の３Rのリデュース（減量）、リユース（再利用）としても理想的な取り組みであると高く評価されました。

受賞式には、本会理事長も出席し祝賀パーティーでお祝いの挨拶をさせていただきました。冒頭の挨拶を韓国語で始めたため出席者から喝さいを浴びていました。

表彰式終了後には環境省を訪問し、小泉進次郎環境大臣に受賞報告をしました。

受賞された岡崎先生、片岡VYS部長、呉基常任理事（韓国）

活動報告する片岡部長

左から審査委員2名、韓国公使、日社済理事長、毎日新聞社長、受賞者3名、朝鮮日報社長

大臣席に座る片岡部長と小泉大臣、岡崎先生、藤田さん

新居浜工業高等学校は、1999年から空飛ぶ車いす活動に取り組み始めました。”新しい分野への挑戦“を掲げ、機械科の先生が中心になり機械科同好会を復活させ、途中からVYS同好会にも参加を呼びかけ学校行事として修理活動を行うところから始まりました。

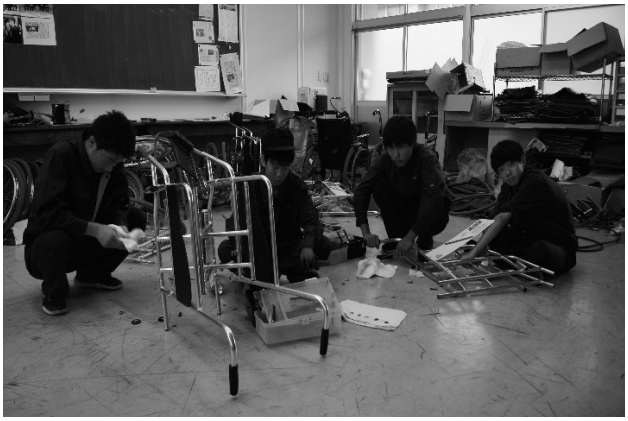
翌2000年の修学旅行は韓国でしたが、校長から持っていってはという提案があり、それから継続して韓国への車いす寄贈および修理活動が行われています。

現在はVYS部の5人が部活動を継続し、機械科では授業の一環で、一年生も車いすの修理に携わっており、学校を挙げて活動に取り組んでいます。

その成果として、修理・再生された車いすは、約20年の間に現地修理分も含めるとこれまでに累計2000台を突破しました。その贈り先は国内だけでなく海外の福祉施設など寄贈国としては韓国のほか、タイ、スリランカなど計13か国になりました。

これからも限りある資源の有効活用並びにものを大切にする精神に基づき、この車いす修理ボランティア活動を継続していきたいと考えています。

部活動の様子


部活動の様子

部活動が行われる教室の軒下に積まれた修理前の車いす

教室内に分別保管されている車いすの部品

2019 震災復興と車いす支援

空飛ぶ車いす、東北へ行く!! (9回目)

東北車いす支援は、2011年3月23日に福島県災対本部の要請で避難所に車いす23台を送ったことから始まりました。初訪問は2011年5月。このとき女川町立病院裏で水没車いす18台を発見し、全国の空飛ぶ車いす参加校が再生しました。また、神奈川工科大学（KWR）は学内に呼びかけ、全町避難の双葉町民が暮らす旧騎西高校（埼玉県加須市）に4週連続で車いすと生活雑貨を届けました。そして被災3県の要請で、空飛ぶ車いす参加校は3年間で仮設住宅や老人ホームなどに380台の車いすを届けました。

11年5月に女川町を訪ねたOBたちが、この支援を一過性に終わらせたくないという想いから、空飛ぶ車いすの一環で毎年東北支援を続けています。今回は平成から令和に変わる4月29日～5月1日に、女川町社協、老健施設気仙苑（大船渡市）、陸前高田市社協を訪ねました。

震災から8年。風化が進む中の三陸訪問は、初参加の学生や連続参加のOBにとっても途半ばの復興状況を知る良い機会となっています。参加した学生のレポートをお届けいたします。

参加メンバー

新潟医療福祉大学(FWS)＋OB	市川瞳(4年生)、中澤ほのか(4年生)、横山侑(4年生)、小池涼太郎(2年生)、小林海斗(2年生)、本間圭太(2年生)水野遊護(2年生)、村山保(2年生)
	嶋見優太(OB)、中野正幸(OB),柴田恭介(OB)
神奈川工科大学(KWR)＋OB	塩田真菜(3年生)、善山友香(3年生)、山崎雅沙矢(3年生)、鈴木琴美(2年生)
	後藤佳宏(OB)、梅原直人(OB)、池田巧(OB)

修理会の反省・これからやること

新潟医療福祉大学2年
小池 涼太郎

今回の修理会を通して感じたことというと、まず、2回目の参加であり、1人で車いす修理をすることができるようになりました。ですが、まだ修理したことのない車いすがあり、修理に手を焼きました。次に、修理班にて班長として選ばれ、指示を班員にうまく与えることができませんでした。この2つは、これからの修理会での課題として挙げられます。また、修理のスピードが遅く、原因として、前回の東北修理会に比べると人員が少なかったこと。そもそも経験者が少なかった。など他にも、技術面コミュニケーション不足が挙げられました。先程の個人の課題の他に、サークル全体の問題点、改善点を見直す良い機会でした。

次に被災地訪問で感じたことについて、去年に比べて街の復興状態がどの地域でも目に見えた変化があり、陸前高田市の防波堤が去年より大きくなっているなど、復興への大きな前進を目の当たりにすることができました。来年も参加し、街の状況を確認できたらと、考えています。

これからも、技術・知識を高めるため、OBや神奈川、高校生などの方たちとの修理会にもっと積極的に参加していきたいです。

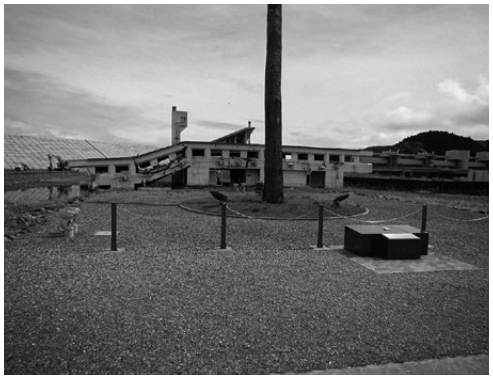
東北修理会で感じたこと

新潟医療福祉大学2年
小林 海斗

今年で2回目の参加でした。去年よりも修理が出来るようになったので、1台でも多く届けられるようにするという目標をもって今年は参加しました。しかし、実際に始まると足りない知識や技術力がどんどん出てきました。さらに、1台の車いすを修理するのに多くの時間を費やしてしまい、午前中の目標の完成台数を大幅に下回ってしまいました。

今回は反省が多く見つかりました。見つけた反省点は、次にこのような活動があるときや普段の活動で改善したいです。特に、改善しなければならないのが、修理する速度を上げることだと思いました。速度を上げるためには、いかに各部品をきれいにかつ迅速に用意することができるかが大切です。そのためにOBの方から学んだ効率のよいやり方や工具を取りに行く時に少し走る、基本の修理方法をいちいち確認せずにやるなど当たり前のことをしっかりとやりたいです。

次回は、実際に家庭に訪問しその場で修理をしたいです。今どのような車いすが本当に必要としているのか、病院や施設ではできないその方にしっかりとあう車いすの調整を学びたいのでやってみたいです。



初めての東北修理会

新潟医療福祉大学2年
本間 圭太

私は震災当時、新潟市内の学校で授業を受けていました。新潟市内ですら、とても揺れを感じたこと今でも覚えています。そして、私はこの修理会をきっかけに初めて東北の被災地を訪問しました。また、被災気仙沼伝承館の館長に当時の津波の様子やその教訓もうかがうことができました。私も含め誰もが津波で何万人も死亡するとは思っていなかった。しかしそのような油断が、多くの犠牲を出したのだと被災した方々は語っていました。その教訓を生かして今後の生活に役立てていきたいと強く感じました。

今回は、大船渡市の介護老人保健施設「気仙苑」で部屋をお借りして作業させていただきました。車いすの状態を点検した結果、修理箇所が平均5.8か所も見つかりました。これは、普段FWSサークルとして修理している車いすと比較して少し多く、汚れも多かったです。しかし、この修理会のおかげで壊れかけていた車いすを再生し、廃棄を大幅に削減できました。来年以降もまたこの活動を続けていければいいと思います。

今回の東北活動を受けて

新潟医療福祉大学2年
水野 遊護

東日本大震災の当日、私は小学4年生で学校で帰りの会をしている時に地震を体験しました。そのころは神奈川に住んでいたので震源地からはかなり遠かったのですが、それでもすごく怖かったのを覚えています。震災のニュースを見て、これ以上被害が大きくなってほしくないと思っていました。

初めて女川、大船渡、陸前高田を訪問したのは震災から8年経ってからでした。女川では、語り部さんのお話を聞き女川の震災状況について教えていただき、津波の事を忘れるのではなく被害の詳細を理解して沿岸部には商業施設などを建て人家は標高が高い山の上に建てることや、防潮堤を作ると海が見えなくなるとのことで防潮堤は作らず沿岸部の道路が代わりになることを聞いて、前向きに対策をする姿勢がすごいと思いました。

なお、私は津波被災地の老人ホームでの修理活動は復興に役立つと思っています。直接、復興に役立つことがなくても毎回訪問させていただき修理することでつながりが切れずに長く続けていくことが大切だと思うからです。また、続けていくことで僕らの次の世代もこの震災の被害について知る機会になり、震災の記憶を薄れないようにできると思います。

倒壊してしまった女川交番

私たちができること

新潟医療福祉大学2年
村山 保

今回、震災から8年が経った被災地を訪れる機会をいただきました。津波の被害に遭った女川では、また津波がきたら、即座に逃げることを前提として、防波堤を作らない復興を実現されていました。女川の方々は、津波で大きな被害に遭われても、女川を守りたい、景観は変えたくないという気持ちでこのような選択をされたと聞き、そのことに深く感動しました。

大船渡では、介護老人保護施設の気仙苑で、車いすの修理をさせていただきました。私たちは、車いすを修理することしかしてないし、それしかできないといっても過言ではありません。それでも、この活動で震災から8年以上、気仙苑の方々と関わっていけること、車いすを直すという僅かではありますが、支援ができること。それを実感することができました。

私たちができることは、震災の悲惨さを知ることはもちろんですが、被災者の方々が教えてくださった教訓を肝に銘じ、それをもっと周りの人に伝えていくことだと感じました。また、被災地の商業の正しい現状を、自分の周りの人に伝えることで、僅かではありますが、商業の面での復興の手助けをできるのではないかと思います。

4年目の東北活動

新潟医療福祉大学4年
市川 瞳

2016年（当時1年）の頃から東北修理会に毎年参加し、今回で4回目の東北活動への参加となった。今年の東北支援は今までと違い修理会よりも震災学習がメインとなっており、“当時の東北”を現地の方や各社会福祉協議会の方の生の声を聴くことができた。

中でも仙台市若林地区の被害の話が、今回で一番衝撃を受けた。若林地区は平地だったために、他の地域よりも水が引くのに時間がかかり、避難場所の小学校は避難場所であると同時に遺体の保管場所にもなっていた。小学校では授業中に津波被害に遭ったため、た

くさんの児童がいたが、子供たちの目には触れないように配慮していた、とのことだった。津波に遭い、いつまた津波が襲ってくるかわからない恐怖を背負ったまま、その中で子供たちに更なる恐怖を負わせないその配慮に、ただただすごいとしか言えなかった。

昨年東北活動に参加した際の、「モノの復興もしなくてはいけないが、人の復興の方が今は大事」という言葉が私の中に今でもとどまっている。震災から8年が経過したが、今なお心の傷は癒えたと言い難いと思う。今回の東北活動で初めて施設の方ではなく、一般の方々にも直接話を聞けたというのは、人の復興も進み始めたのではないだろうかと感じる。

肉眼で見る「東北」

新潟医療福祉大学4年
中澤 ほのか

今回の活動中に女川で、情報館の語り部スタッフの方からお話を伺う機会がありました。町の様子もガイドの説明と共に見て回りましたが、新しく造られた町や港に紛れて、当時交番だったコンクリートの残骸がありのままの姿でぽつんと残っていたのが、非常に印象的でした。

陸前高田で、奇跡の一本松や当時避難場所だった展示館を訪れたときもそうでしたが、「遺せるものは当時のままの姿で、他は再び来るかもしれない津波に備えて新しく」という住人の考えが、町として具現化されていました。そしてその景色の一つ一つに、「あの震災はとても恐ろしい、忘れようもない出来事だったんだよ」、「でも私たちはまた立ち上がって、この地で生き続けるよ」という思いが込められているようで、被災地で暮らす人々の心の強さを感じ取れました。

今回の修理会に参加したメンバーは私も含め、車いすの修理技術が中途半端にしか身についていない人が多かったです。修理・点検が不十分な車いすを出してしまうと、利用者の身に危険を及ぼしかねません。このままの修理技術で活動を続けていては、復興の役に立つどころか、寧ろ迷惑になってしまいます。

被災地に住む全ての人々の支えになれるように、参加メンバー一人一人が修理技術を上げていかなければなりません。

多様に「繋がっていく」車いす

新潟医療福祉大学4年
横山 侑

今年は修理以外の目的として被災地の方々のお話を聞く時間が多くあったことが「東北修理会」としての意味を深めることができたのではないかと自分としては感じております。当時のお話の理解をさらに深めることができたことが、真の意味で「意味のある修理会」に近づいたのではと思います。

1年おきに東北の被災地を目にすると、大きい変化だけでなくガードレールの塗装具合1つからでも、復興への歩みへの力強さを感じます。

今回は現地のガイドの皆さんからお話を聞くことができ、新しい望みを持つことができた人が持つ強い意志と、力強さを感じました。実際に体感したことは、自分にとって貴重な学びとなりました。

車いすの修理活動も、本当に多様な意味を自分にもたらせてくれました。国内の修理も海外にむけて車いすを修理することも、まず自分が目の前のできる事として、一つ一つ繋げていくことが大切なのではと感じます。大学を通じた分野に限らず、ここから学んだ事は、自分の視点を強める材料として大切にしたいと思います。

「空飛ぶ車いす」inスリランカ

グローバルな視点の育成を目指して

新潟県立新潟工業高等学校

本校では、2004年から空飛ぶ車いすの修理ボランティアに参加して、車いすの修理を行ってきました。また、修理している車いすがアジアのどういう人達に送られているのかを実際に車いすを持って行って寄贈し、生徒に理解してもらいたいと考えて、何回か輸送ボランティアにも参加してきました。

2017年に文部科学省のスーパー・プロフェッショナル・スクール事業の指定を受け、その中でグローバルな視点の育成という目標があげられ、その育成プログラムとして海外ボランティアに参加して、工業高校で学んだ技術を活かして国際社会貢献の機会を増やすということがあげられました。

今回、その取り組みとして、スリランカへの車いす寄贈のボランティアを行うことになりました。修理している車いすが送られているアジアの人達の現状を生徒たちに理解してもらいたいと考えていましたので、良い機会になったと思います。参加した2名の生徒のレポートをお届けいたします。

訪問日程：2019年9月14日～17日（4日間）
参加者名：磯部雄大（機械科3年生）、鈴木陽（機械科3年生）

1. スリランカに車いすを届けようと思った動機はなんですか?

動機は、自分で修理した車いすがスリランカの方々にどのように思われ、どのような人に送られるのかということを知りたかったからです。また、高校1年での海外研修と2年での修学旅行で2回海外に行ったことがあり、その2回の活動を通して海外に興味を持ちました。そして、今までボランティア活動をしたことがなく今回のスリランカに車いすを届けるという活動が自分の人生でいい経験になると思いました。（磯部）

今回参加を決めた理由は、もともとボランティアに興味があったからです。小、中学校共にボランティアに参加していて、機会があったら参加したいと思っていた所、今回のスリランカへのボランティアの話を聞き、良い機会だと思い参加を決意しました。（鈴木）

2. 4台の車いすはどなたに渡しましたか?

車いすは病気で体が動かせなくなった3人の僧侶と貧しい家に住んでいて体に障がいのある高齢者1人に渡しました。渡した車いすを喜んでもらえてうれしかったです。（磯部、鈴木）

車いすを受け取った、体に障がいのある高齢女性

病気で体が動かせなくなった3人の僧侶にプレゼント

3. 車いすはスリランカの人に役立つと思いますか?

スリランカでは、道路が舗装されてなく足場が悪い場所や森の中などに家があり、その中に車いすが必要な人がいます。しかし、金銭的に車いすを買うことができない人もいるのだと思います。だから、スリランカのそのような人達の役に立つと思います。(磯部)

車いすを渡した人たちは、お金の面で車いすを入手するのが困難な人だったので、移動手段が増えたので役だったと思います。(鈴木)

4. スリランカで会った人(コーディネーター、学生、利用者)の印象はどんなこと?

私は、普段、生活している中で海外の人達と関わることがありません。だから、今回の活動でスリランカの日本語学校の学生の方々や日本語ガイドの方たちとうまくコミュニケーションをとることができるのかと不安でした。でも、スリランカの方たちに親切に接してもらいうれしかったです。また、日本語がとてもうまく、積極的に話しかけてもらい、いい交流ができたと思います。私も少しだけだけど自分から学生の人達に話しかけることができました。スリランカであった人達は、全員いい人でやさしい印象でした。(磯部)

ガイドの人は、日本とスリランカとの歴史や、お互いの良い所を詳しく解説してくださり、日本とスリランカの事が本当に好きなんだと思いました。また、日本語学校の生徒は、初め会った時に、盛大に歓迎され、海外の人だからだと思っていたが、昼食を一緒に食べていると、学生や、先生が積極的に話しかけてくれ、また、日本についてや、スリランカの感想を聞かれ、明るい人が多い国なんだと思いました。(鈴木)

日本語学校の生徒たちとの交流

日本とスリランカの旗を持って歓迎してくれた生徒たち

5. 今回の活動で他の高校生に伝えたいことはなんですか?

私は、今回の活動で他の高校生に伝えたいと思ったのは、普段、勉強していることの大切さや世界の問題を知ることです。とくに英語が大切だと思いました。空港やスリランカの街中の店では、ほとんど英語しか通じなく、不自由な思いをしたことがありました。その時に英語を話すことができればと思いました。英語の大切さを知ることができました。世界の問題は、日本で生活しているとあまり関心がなく、自分には関係ないと思いがちですが、そうではなく、しっかり世界の問題には目を向け、今世界では、何が起きているのかを知ることが大切だと思います。現代は、自分が生まれた国だけのことを知っているだけではいけないと思います。どんな仕事の場面でも、今はグローバルな視点で世界との繋がりを大切にしている時代です。だから、世界の問題を知ることが大切だと今回の活動を通して感じました。(磯部)

まず、今回のボランティアに参加して、現地の人に車いすを渡して思ったことは、車いすを使ってもらえてうれしかったという事です。自分で直したということがあり、よりいっそううれしさが増しました。そのため、今回のスリランカのボランティアに参加して、実際に見学できたのは貴重な経験であり良かったと思います。また、国際貢献にもつながる良い機会だと思いました。(鈴木)

「空飛ぶ車いす」海外活動 in タイ

神戸市立科学技術高等学校 空飛ぶ車いす研究会

タイへ出発する生徒たち

学校から運び出される車いす

スワンナプーム空港で車いすをピックアップ

飛行場内で運搬される車いす

日　程：令和元年8月26日（月）～ 31日（土）6日間
訪問地：タイ王国 カンナチャナプリ県ターマカ市 マカラック病院

今回で2回目となる海外活動。日本国内で使われなくなった車いすを点検・整備して東南アジアを中心とした車いすが必要な障害者・児など購入困難な人々に車いすを寄贈する活動の中で、それだけでは感じ取ることのできない経験を家庭訪問や贈呈式など直接利用者に手渡しすることで、車いすを利用している人たちの使用状況や生活環境などを生徒たちが肌で感じ、今後の活動に役立てるための学習の場とすることを目的として実施しました。その成果並びに生徒のレポートを報告いたします。

マカラック病院にて集合写真

病院内で点検・整備作業

病院内で点検・整備作業

病院内で点検・整備作業

マカラック病院についた100台の車いす

■活動成果

自分たちが毎日の学校での活動をしている中で想いを込めて点検・整備を行った車いすを直接海外の利用者の方へ手渡しすることで、現地の社会インフラや経済情勢を確認し利用される障害者・児の方の想いを生徒自身が肌で感じられることができました。具体的には車いすを受取った人や家族の人たちの「ありがとう」の言葉を直接言ってもらい、泣きながらお礼を言われる姿や喜ぶ顔を見て、今後の修理活動においてやり甲斐を持つことができたと思います。また、生徒ひとり一人の自己有用感を養うこともできました。

特に得られた成果は小児用や利用される方の体の特徴や病気によって使える体の部分で車いすの選定をすることなどフィッティングの難しさも体験できました。これらを踏まえて発送段階で要望に合わせた車いすを選定することが理解できました、その他には生活環境など道路整備の状況からノーパンクタイヤの必要性、およびキャスタ部分が方向を決める個所であることを再認識できました。

更に今回のタイでの体験により、生徒自身が直接利用される方の生活環境や社会インフラ、経済情勢などを肌で感じることによって今後の車いすの修理・点検を行う上で実用性のある作業を行うことができるのではないかと思います。また、異文化に触れ、国際理解を深めることでグローバル化の進む現代社会において有用な機会になったと考えます。その他にも車いす利用者の実態を把握することにより、自分たちの活動の役割を再認識することができたのではないかと思量します。

■生徒レポート

去年の経験を生かせることができた

機械工学科3年　**喜多 加織**

私は今回2回目の参加で、昨年は達成する事ができなかった「完璧に修理をする」という目標を、今年は達成する事が出来ました。昨年は初めての海外出張修理で余裕がないところもありましたが、今年は昨年の経験からスムーズに動く事の出来た場面が多くありました。今回の出張修理をして、自分たちが修理・整備をした車いすでさえ海外へ輸送されている間に、きっちり整備できたと思っていたのにガタが出て、不備があったりして日頃の整備で足りない部分が出てきてしまうのはとても残念なことだと感じました。家庭訪問の際には車いすを使用する方の身体に合わせるフィッティング作業を行い、タイ人の長い脚にもフィットする車いすを直接寄贈することができよかったです。直接車いすを寄贈することで、夏季休暇中に行かせていただく地域への出張修理ボランティアとはまた違う体験や経験をすることができました。車いすを必要としている方の顔を間近に見ることができ、自分たちの活動は本当に、人の役に立っているんだと強く感じました。今回の出張修理点検に行き、修理・点検をするうえで、自分たちの通常の部活で使っている工具箱に加え最低限の工具をもっていくことで、寄贈する最終確認の修理点検をすることができてよかったです。実際に家庭訪問に行くことで日本とは違う、道路状況であったり家の環境など当たり前である食事や言語の違いを深く知ることができ、日本にいるだけでは異文化に触れる機会が少なく、今回参加してたくさんの経験をすることができよかったです。改めて自分がどんな環境にいて過ごしやすいか、車いすを100％に修理・整備が可能な設備の整っているところにいるか感じることができました。

今回の修理活動をして車いすの輸送のされ方を知り、日本の航空会社でもやはり車いすが傷付いてしまう輸送のされ方だと感じました。前回よりは大きな傷はなかったものの気になる部分があったので、今回のことを知り、もっと丁寧に車いすが輸送されるように改善したいと思います。また整備の仕方も現地に到着してから修理を行うという手間や同じ作業を繰り返すのは、きっちりと日本で修理や点検ができていないと思い、もっと日頃の作業を怠る部分が出ないように部員や同じ活動をしているグループの方にも連携をとり、現地の修理が不要で、すぐに車いすを使えるようにしたいと思いました。今回の出張修理に行き、輸送のされ方、日本での整備の出来など、これからの活動をより良くするために多くの改善しなければならない所を見つけることができたので少しでも改善し、良質な車いすを寄贈していけるようにしたいと思います。また、この活動をご支援していただいている方にも感謝を忘れず日々の作業をしたいと思います。

自分たちの活動は感謝される

機械工学科2年　**松森 輝**

タイに行った第一の感想として当たり前のことではありますが、まったく日本語が見えなかったことです。なのでコンビニなどでは日本語のお菓子などを見るたびに安心していました。

次に驚いたことは、病院での歓迎セレモニーで先生が日々の活動について日本では年間5万台の車いすが廃棄されることを聞いたタイの方が驚いていたことが印象的でした。それを見て自分達の活動をまだ知らない国もあるかもしれないという実感を持てました。

そして一番記憶に残っているのは家庭訪問の時に車いすをもらった人達が喜んでくれたことや、特に泣いて喜んでくれる人がいたのが記憶に残っています。自分たちの活動で、ここまで喜んでくれる人がいるんだと身に染みて実感しました。　今回のタイでは最終日には体調を少し崩してしまいましたが、全体的にとてもいい経験をすることができました。

サングワンさんのお宅へ家庭訪問

スワンさんのお宅へ家庭訪問

ワタナーさんのお宅へ家庭訪問

タンテップさんのお宅へ家庭訪問

シャリオさんのお宅へ家庭訪問

ヨーリさんのお宅へ家庭訪問

カンチャイさんのお宅へ家庭訪問

スウントーンさんのお宅へ家庭訪問

タワナ君のお宅へ家庭訪問

サムアンさんのお宅へ家庭訪問

家庭訪問者リスト（敬称略）

名　前	性別	年齢	症状
サングワン	女	76	脳梗塞のため右半身が麻痺
スワン	女	75	高齢のため
ワタナー	男	50	脳梗塞と生まれつき目が不自由
タンテップ	女	77	高齢のため
シャリオ	女	78	脳梗塞と高齢のため
ヨーリ	男	72	糖尿病で右の膝から下を切断
カンチャイ	男	48	脳梗塞 2回
スウントーン	男	76	脳梗塞
タワナ	男	15	バイクの事故で全身麻痺
サムアン	男	58	高所から落下し下半身麻痺

タイ出張修理活動を終えて

神戸市立科学技術高等学校 空飛ぶ車いす研究会 顧問　有吉 直文

タイでの活動は今年で2回目になります。昨年と同様に空飛ぶ車いす活動の必要性を感じて帰国することとなりました。

タイの空港では車いすを持ち込む時に止められ詳しく話を聞かれ拙い英語とジェスチャーで理解してもらい入国することができました。日本と海外での違いを実感することは、車の車線変更のタイミングや野良犬が悠々と歩いていたり、路面店の多さや信号待ちの車にジャスミンの花で作った花輪を売りに来る子供、特にバイクの2人乗りは当たり前3人乗りや4人乗りでヘルメットは籠に置いたまま運転する親子や子供がいることに改めて驚きました。私が驚いている姿を現地のガイドの方はにっこりほほ笑んでいました。

タイへ行った時期は雨季であり雨の心配をしていましたが、活動している間は雨も降らず、タイは南国の印象がありますが、日本よりも涼しく感じ過ごしやすい気候でした。

今年はタイの西側ミャンマーの隣になるカンチャナブリのマカラック病院へいきました、カンチャナブリは映画で有名な「戦場にかける橋」で出てくる泰緬鉄道が走っているクウェー川鉄橋があるところでした、到着した日はクウェー川のほとりにある、レストランで夕食を取りましたが、ここに行くまでに鉄橋の近くでは観光客や地元の少年がギターを弾いていて、また川では釣りをしている老人など素晴らしい景色のところでした。

病院にはあらかじめ日本から船便で送ってきていた車いすが100台と神戸から運んだ10台、合計110台の車いすを点検する予定になっており、時間的に間に合うか少し不安でしたが、生徒たちの頑張りで2日間をかけてすべての車いすの点検と補修をすることができ、ほとんどの車いすが現地の医師とソーシャルワーカーが必要とする人たちに合わせて選定し、車に積み込まれ運ばれて行きました。

今回の家庭訪問では家族の方の熱心な介護が印象的でした、その中でも車いすを受け取ったときは、本当に感謝されてうれしくなりました。タイ人の体の特徴として膝から下が日本人と比べて長くステップの位置の調整が必要です。この地域は15万人の人口で1500人以上の障害を抱えた方が今も車いすを必要としていると病院関係者の方が話してくれました。

家庭訪問で印象に残っていることは15歳の少年が交通事故により全身に麻痺が残り、身体を動かすことも困難な状態から家族の支えと本人の頑張りで、手足を少し動かせるようになったと家族の方が話してくれ、本人が「リハビリを頑張り家族の仕事を手伝いたい」と将来の夢を語っていました、同世代の本校の生徒たちがどのようなことを考え、気持ちに響いたかは計り知れないと思います。

空飛ぶ車いす活動でのあり方や整備技術・作業効率の向上などをしっかりと見つめ、生徒達と共に学んでいき、学校での活動はもちろんのこと、海外への出張修理活動を続けていきたいと思います。

最後になりますが改めてこの活動を支援してくださった皆様へは感謝申し上げます。

クウェー川に掛かる泰緬鉄道の鉄橋

ジャワ島からのレポート

インドネシア・バリ島には日本人の受け取りボランティアがいます。彼女は「空飛ぶ車いす」の趣旨をよく理解し、輸送ボランティア（旅行者）の方と連絡を取りあってホテルでの車いす受け取りをしてくれます。その車いすについて、現地の紹介者とともに利用者を積極的に探してくださり、最近ではバリ島だけでなく隣接するジャワ島の東ジャワ州の方にもお届けしています。今回はジャワ島のお2人の喜びの声をお届けいたします。

6月25日
受取先　バスキ（Basuki）君 23歳
東ジャワ州グルシックの孤児院ヌルルウルン（Nurul Ulun）

バスキ君は小児麻痺のため生まれた時から歩くのが不自由で今まで手を使って歩行していました。以前からエンジニアになる夢がありますが、学校は遠く、修理工になる修行をするにもその場所も遠く生活範囲が大変限られていました。車いすによって彼は一人でどこへでも行け、不便な場所では同じ孤児院の仲間が助けてくれることになっています。ずっと手を使って生活していたので力は大変強く、車いすの動かし方にもすぐに慣れ速度も速く動けるそうです。ボランティアのつながりで遠く東ジャワまで届けてもらい、本当にありがとうございますとお伝えくださいとのことでした。

今回運送会社の方には趣旨を理解していただきとても安い価格で車いすを大切に送っていただきました。スラバヤでの受取をしてバスキ君まで届けてくださったのはディディッさんとトゥッグーさんです。今後も協力してくださるとのことでバリ島のほかにも東ジャワへのコネクションが開けました。

9月3日
受取先　Wariminワリミンさん 38歳
東ジャワ州ブリタル県ドコ郡シドレジョ村

小児マヒで幼少のころから部屋の外に出たことがなく、さらに10代で軽い脳梗塞になりさらに動きが不自由になってしまったそうです。家族は車いすを随分前から申請しているそうですが、今に至るまで受け取れていない状態です。写真はワリミンさんと中央がお父様、同じ敷地内に住んでいる親せきと、左側が弟さんです。お母様は仕事で出かけているところでしたが、これだけ男性陣がいれば、交代でワリミンさんを好きなところへ連れて行ってくれそうですね。もう一枚は初めて外にでたワリミンさん。喜びを全身で表現しています。

バングラデシュへの贈り物
マイメンシン県の障害者へ

現在バングラデシュへ届けられる車いすは、主に現地で働いている2人の日本人が年に3〜4回日本とバングラデシュを往復する際、ご自分の手荷物として飛行機で運ばれています。その車いすを現地の海外医療協力会に所属する日本人（理学療法士）が受け取り、障害者コミュニティセンターとの打合せに基づき、利用者の優先順位を決めてお渡ししています。今回、直近にお渡しした方お2人についての情報と写真をお届けいたします。

Fatema can Move.

Fatema is 9 years old, She has two brothers and three sisters. Her mother name is Ayesh Akter, Adress; Trisal, Dhanikola, Mymensingh. She is CP Child. When she was born she suffered for lack of oxygen and her family admitted her in the hospital but she had no any change. She lay in her room in the bed and grew-up. Again they come to PCC and PCC PRT staff advises her family to receive therapy from PCC regularly. But now Fatema is 9 years old it is difficult to them to bring her out and visit any place. Her family financial condition is very poor and they could not buy a wheel chair for her. So they request PCC Staff a wheelchair for fatema. Seeing the real condition of fatema PCC give her a wheelchair.

Now Fatem can visit any place and her family can bring her in PCC to receive therapy by using the wheelchair.

ファテマはでかけるようになりました

ファテマは9歳です。兄弟は兄が二人、姉妹が三人です。彼女のお母さんは　アイシャ・アクタールといいます。マイメンシン県のトゥリシャルにあるダニコラ村に住んでいます。センターからはバスで1時間ほど離れたところにあります。ファテマは脳性麻痺の子どもです。ファテマが生まれたとき、すぐに泣かなかったので、酸素が脳に足りなくなりました。家族は病院に連れて行きましたが命はとりとめたものの、改善することがありませんでした。ファテマは部屋のベッドの上でいつも横たわっており、この部屋の中で大きくなりました。家族は再びファテマを何とかしようとPCC（Protibondhi Community Center; 障がい者コミュニティセンター）にファテマを連れて訪問しました。そしてPRT（Primary Rehabilitation technician；リハビリテーション技術者）が対応し、PCCに毎週リハビリを受けに来るようにアドバイスしました。しかし、ファテマはもう9歳で、家族にとって彼女を連れてどこかに出かけていくというのはそう簡単なことではありません。家族は経済的にとても貧しく、車いすをファテマに買ってあげるのは到底無理なことでした。そこで家族はPCCのスタッフに車いすをファテマに都合してほしいと頼みました。家庭訪問をして調査した結果、家族の言うことは本当で、PCCから皆さんの空飛ぶ車いすの車椅子を贈呈しました。

今はファテマはどんなところでも出かけていけるようになりました。また、家族はファテマがリハビリを受けるために車いすを使ってPCCに来ています。

Abu Bokkor Siddik

Abu Bokkor Siddik is 55 years old. His wife name Chompa Begum, She is a house wife. He has four daughters. He is a physical disability Stroke right Hemiplegic. They are living Akua Chukaitola in Mymensingh.
In March 2018 Abu bokkor Siddik came to PCC for physiotherapy and PRT officer enlisted him member of Dadu club. He cannot stand and walk alone. All the time he is living in the room. He would like to go to outside for recreation so need for him a wheel chair. PCC Arrange a program called Dadu Club, He joined this club as member.

PRT officer give him a wheel chair and now Abu Bokkor Siddik is very happy to use this chair for his daily activities.

アブ・ボクール・シディックさん

アブ・ボクール・シディックさんは、55歳です。彼の奥さんは、チョンパ・ベグンさんといいます。奥さんは主婦で、仕事をしていません。アブさんには4人の娘がいます。アブサンは体に障がいがあります。（脳卒中で倒れて右半身不随になりました）家族はマイメンシン県のアクア町チュカイトラ村に住んでいます。

2018年3月にアブ・ボクール・シディックさんは、リハビリを受けにPCC（Protibondhi Community Center; 障がい者コミュニティセンター）にやってきました。そしてPRT（Primary Rehabilitation Technician; リハビリテーション技術者）スタッフが、ダドゥクラブ※のメンバーに招待しました。アブさんは、立つことも歩くこともできません。彼はいつも部屋に閉じこもっています。彼はダドゥクラブのことを聞いて、そのレクリエーションに参加するために外に出たいと思うようになりました。それには車いすが必要でした。PCCは空飛ぶ車いすの車いすを運ばれたとき、アブさんに車いすをあげて、是非ダドゥクラブに参加してもらおう、と思いました。アブさんは、今、ダドゥクラブのメンバーです。

※ダドゥクラブ：PCCのプログラムの一つで、高齢の男性障がい者が月に一度集まってレクリエーションをする。男性が障がいを持つと外に出ていかなくなり、家族としか交流することができなくなる傾向にある。ダドゥクラブに出席することによって、ほかの男性障がい者との交流ができ、自分の障がいをしばし忘れて楽しい時間を過ごせる。ダドゥとは“おじいさん”の意味で、家族的な温かい響きをもっている。

岩手県、秋田県の工業高校が参加

車いす修理・整備会を開催

令和元年、岩手県と秋田県で恒例の車いすの修理・整備会が開催されました。これは社会福祉協議会が主催となり、車いす修理活動を行っている県内の工業高校が参加して、車いすの修理技術を具体的に学ぶ講習会です。今年も2県内から64名の生徒や教諭が参加しました。修理講習をはじめ、情報交換や実際に車いすの修理に取り掛かる事で普段の修理の際に注意すべき点を具体的に教えてもらい、皆さん真剣に聞いていました。

いわて車いすフレンズ

日時　令和元年6月25日
実施　岩手県社会福祉協議会ボランティア・市民活動センター
場所　ふれあいランド岩手体育館
参加　盛岡工業高校、宮古工業高校、黒沢尻工業高校、千厩高校、一関工業高校、釜石商工高校、水沢工業高校、日本社会福祉弘済会

あきた車いすリサイクリングセミナー

日時　令和元年8月8日
実施　秋田県社会福祉協議会地域福祉部・生きがい振興部
場所　秋田県社会福祉会館
参加　秋田県立大曲工業高校、秋田県立男鹿工業高校、由利工業高校、日本社会福祉弘済会

福祉の
共済コーナー

Gibraltar
ジブラルタ生命

毎年10,000人を超える社員と家族がボランティア

インターナショナル・ボランティア・デー

— ジブラルタ生命保険株式会社の社会貢献活動 —

“インターナショナル・ボランティア・デー”とは

当社の親会社プルデンシャル・ファイナンシャルが、「日頃、お世話になっている地域コミュニティに感謝し、貢献するためにボランティアに参加しよう」という趣旨で 1995 年にスタートした、世界中のプルデンシャルグループ社員が各国・地域でボランティア活動を行うプログラムです。

ジブラルタ生命は 2001年から、毎年10月を基準にこのインターナショナル・ボランティア・デーに取組み続けております。

2019年の活動

北海道から沖縄まで全国 47 都道府県に所属する社員と家族、約 11,600 人 が地域清掃やスポーツイベント等の手伝い、福祉施設の清掃やご入居者とのふれあいなど、多様なボランティアに取組みました。

ボランティア先施設の皆様から頂戴した声

- ボランティアされている、ジブラルタ生命社員皆さんの元気な声に励まされました。
- 掃除していただき、ベランダや壁がみるみるきれいになるのを眺めるのが楽しかった。
- いつも気になっていたエアコン周りを清掃してくれて、とても助かりました。
- 普段なかなか手の回らないところも清掃してもらい、ありがたかった。
- 窓を拭いてもらい、いつも気になっていた汚れが綺麗になり施設が明るくなった。

ジブラルタ生命は、福祉施設でのお手伝いをはじめ、基本理念である「人間愛・家族愛」に根ざし、様々なボランティア活動に積極的に取組んで参ります。

保険に愛という本質を。

「公益財団法人 日本社会福祉弘済会」はジブラルタ生命と提携し「福祉の共済」を推進しています。

アジアに届け!!
空飛ぶ車いす 2019

緊急スリランカ支援（車いす100台）

4月22日スリランカ・コロンボを中心に発生したホテル等の爆破事件は、日本人1人死亡を含む死傷者7百人超（外国人38人）の大惨事となりました。翌23日に現地ボランティアのアリーさんから「スリランカは車いすが少ない。負傷した人たちに車いすを届けてほしい」との要請がありました。それを聞いて、インド洋津波（2005年）以降スリランカを訪問してきた空飛ぶ車いすの OBは自分たちが中心となって、一人でも多くの人に車いすを届けようと修理会を計画し、以下の通り支援活動が行われました。

また、車いすはコンテナ輸送しますが、輸送費（1回約60万円）は、書き損じはがきを収集して充当するため、収集ボランティアを呼びかけました。

1. 支　援：車いす（100台）
2. 寄贈先：サハナサラナ財団
   SAHANASARANA SOCIAL WELFARE FOUNDATION
   President M.Ariyadasa
3. 支援活動：スリランカ支援修理会の開催
   第1回：5月25日（土）下妻倉庫（茨城県）OB有志
   第2回：6月 1日（土）筑波大付属聴覚障害支援学校　支援学校＆OB有志
   第3回：6月 8日（土）大森学園高校（東京）大森学園高校＆OB有志
4. 輸送時期：6月15日 100台　※スリランカ到着は約3週間後

車いすを修理する皆様へのお願い

今春修理後の車いすを韓国に送る前に再点検したところ、100台のうちなんと61台も修理が必要でした。そして中には残念ながら、部品がついていない等で廃棄せざるを得ない車いすもありました。そこで車いすを修理する皆様へお願いがあります。

・修理作業や部品の清掃作業は丁寧に行い、修理後の点検も必ず行うこと

・運搬時に破損しないよう梱包材で車いす全体を覆いしっかりと梱包すること。

皆さんの手で再び命を吹きこんだ車いすが海を渡り、多くの人々の足となり大変喜ばれています。
ぜひこれからも空飛ぶ車いすのボランティア活動の継続をよろしくお願いいたします。

下妻倉庫内で車いすを再点検するOB達

下妻倉庫のボランティア活動に参加した８名のOB

再点検完了の車いす

公益財団法人 日本社会福祉弘済会
〒136-0071 東京都江東区亀戸1-32-8　TEL.03-5858-8125　https://www.nisshasai.jp/

Welfare［ウェルフェア］
2019 66
「空飛ぶ車いす」特集号　～青少年の活動レポート～
発行日：令和元年12月15日　編集・発行：公益財団法人 日本社会福祉弘済会　〒136-0071 東京都江東区亀戸1-32-8 TEL.03(5858)8125 FAX.03(5858)8126